亀甲船

亀　甲　船

朝鮮・平壌
外国文出版社
チュチェ 98（2009）

目　　次

はじめに

16 世紀末、日本全土を平定した豊臣秀吉は、無謀にも朝鮮侵略に乗り出した。日本で文禄・慶長の役と呼ばれているこの戦争は、朝鮮では壬辰祖国戦争または壬辰倭乱と言われている。

日本侵略軍は水陸並進策をもって一挙に全朝鮮半島を占領しようともくろんだ。

ここで朝鮮水軍は、朝鮮南海から西海へ向かおうとした日本水軍を完全に制圧、撃滅し、戦争の勝利に大きく寄与した。

朝鮮水軍がはるかに優勢な日本水軍を相手取って連戦連勝したのは、名将李舜臣将軍以下全将兵の愛国的奮戦と有力な軍船亀甲船の活躍があったからである。

15 世紀初め朝鮮に出現した世界最初の鉄甲船亀甲船は、堅固で速力が大きく、すぐれた銃砲を装備した独特な構造を持つ海戦に便利な兵船であった。

本編集部は、朝鮮の世界的な発明品である亀甲船と中世の朝鮮文化につき、読者の理解を深めることができればという願いをこめて、亀甲船の活躍と、軍事技術上の特性、戦闘力などの資料を総合して本書を刊行することにした。

編　集　部

亀甲船（模型）

Ⅰ　亀甲船の出現と時代的背景

朝鮮には古くから伝わる『亀の歌』という歌謡がある。

亀よ亀よ頭を上げろ
上げねば焼いて食っちゃうぞ

この歌は、朝鮮人が遠い昔から亀に親しんできたことを示している。

亀は胴部を覆う甲に頭、四肢、尾を隠して身を守る、温順な、長寿する動物として知られている。

朝鮮人は伝統的に亀を好んできた。それは、全国各地で亀をあしらった歴史遺物が多く見出されていることからもよくわかるであろう。

有史以来朝鮮はたびたび外敵の侵略を受けているが、海からの侵略も例外でなかったため、すぐれた軍船の常備は不可欠であった。

そうした事情で、1416 年には『乗船直指録』が、1469 年には『経国大典』が編纂されている。そこには船舶技術規定と造船および船舶の運営・管理に関する各種の規定が記されている。このことは、当時、造船が設計図に依って進められ、船舶の統制と検査も技術規定に即しておこなわれたことを示している。ちなみに、世界最初に作成されたとされる造船規定は、イギリスの『ロイド海事規定』であるが、これは 1774 年につくられたものである。

技術文化の長い伝統を誇る朝鮮では、15 世紀、艦船の建造と兵器の製造で著しい進歩をとげた。当時、水軍は軍統率体系を改める一方、艦船の質的構成を改善し、性能のすぐれた新型艦船をつくりだすことに力を注いだ。

壬辰祖国戦争（1592～1598 年）で威力を発揮した亀甲船は、従来の造船技術と海戦法を分析・総合し、それらの長所を生かして建造された独特な兵船である。

『増補文献備考』巻 120 には、亀甲船に関する次のような記述がある。

「わが国の戦艦は、形態が非常に大きく、性能もすぐれている。人びとは数十隻の日本兵船がわが国の戦艦 1 隻に太刀打ちできなかったと語っている。李舜臣（リスンシン）が亀甲船をつくり、それを駆使して連戦連勝したのは、すぐれた船舶に依拠したからである」

亀甲船が初めて実戦に参加したのは、壬辰祖国戦争の開始間もない 1592 年 5 月 29 日であるが、それがはじめてつくられたのは 15 世紀初めのことであった。

亀甲船についての最初の記録は、『太宗（テジョン）実録』にある。ここには 1413 年 2 月、太宗が日本兵船と戦う亀甲船の演習を見たと記されている。同書にはまた、

1415 年 7 月、左代言の卓愼（タクシン）という臣下が王に堤議した国防対策案第 6 項で、亀甲船戦法は多数の敵船と衝突しても損傷を受ける恐れがないため、結局は勝利をおさめることになります、それゆえ亀甲船をより頑丈かつ優秀なものにつくりあげて必勝の手段とすべきです、と提言した、と記述されている。

世界最初の鉄甲船である亀甲船は、科学技術および軍事技術分野でおさめた朝鮮民族の総合的な成果の一つである。

冶金および金属加工術の進歩と火薬兵器の発明、海戦における接舷戦から砲撃戦への移行、そこからくる造船技術ないし艦船建造技術のさらなる向上は、独特な構造を持つ強力な兵船亀甲船を出現させる技術的前提であった。

1413 年２月、王の臨席のもと日本兵船とくらべた新型兵船亀甲船の性能試験がおこなわれた。今日、船舶工業分野で試験航海開始日が該船舶の完工日とされていることに鑑み、亀甲船の出現は 1413 年２月であったと言える。

前後７年にわたる苛烈な壬辰祖国戦争で、亀甲船は日本侵略軍の水陸並進策を破綻させ、戦争の勝利に大きく寄与して朝鮮人民の気概を誇示し、ひいては世界最初の鉄甲船として、独特な船型・構造を持つ強力な兵船として、世界の船舶工学と艦船建造の発達に寄与した。

すべての創造物は、歴史と時代の必然的な所産である。朝鮮の亀甲船も時代の緊迫した要請でつくられたことは言をまたない。

一方、朝鮮人民のきびしい懲罰を受けながらも倭寇（日本の海賊）は、侵略的野望を捨てず、狡猾にも平和的な貿易行為に従事していると見せかけながら、機を見ては待ち構えていたかのように略奪行為を働いていた。

倭寇は朝鮮の複雑な内情につけこんで、1419 年 5 月 5 日、50 隻の船をもって忠清（チュンチョン）道庇仁（ピイン）県都豆音（トドゥウム）岬に、同月 11 日には黄海（ファンヘ）道海州（ヘジュ）の延坪（ヨンピョン）岬に侵入し、略奪行為を働いた。

この出来事に怒った李朝政府は、倭寇の巣窟対馬への遠征を計画した。

当時、対馬島主は対朝鮮貿易をほとんど一手に握って多大な利益を得ていたが、これにあきたらず、海賊たちを使嗾して略奪品の一部を貢がせていた。いわば、対馬は倭寇の根城であり、兵站基地であった。

1419 年 5 月、李朝政府は李従武（リジョンム）を三道体察使（三道軍司令官）に任命して遠征艦隊を編成し、慶尚（キョンサン）・全羅（チョンラ）・忠清 3 道の軍船 227 隻を巨済（コジェ）島の見乃梁（キョンネリャン）に集結させた。

そのうえで対馬島主に海賊の頭目の引き渡しを求めたが、梨のつぶてであった。憤激した朝鮮軍は、6 月 19 日、対馬遠征を断行し、海賊船 124 隻を焼き払い、34 隻を分捕るとともに、多数の敵兵を殺傷もしくは捕虜にした。敵軍の降伏を受けた遠征軍は、7 月 3 日、巨済島に凱旋した。この出来事を朝鮮史では「対馬遠征」と称している。

致命的な打撃を受けた日本の海賊集団は、その後ほぼ 100 年の間、朝鮮に侵入することがなかった。

しかし、彼らの略奪的本性は変わらなかった。16 世紀初め、朝鮮の内情が複雑化し、国力が衰えを見せると、海賊たちは再び朝鮮の沿岸を荒らしはじめた。

対馬遠征後、李朝政府は、貿易を再開し一定の地域内での商行為を許してほしいという対馬島主と商人たちの要請を容れ、1443 年、釜山浦（プサンポ）、塩浦（ヨムポ）（蔚山（ウルサン）郡）、乃伊浦（ネンイポ）（鎮海（チンヘ）市薺浦（チェポ））の 3 港（三浦）での交易を許可するとともに、居留民数を 60 戸に制限する措置を取った。（『癸亥約条』）

こうした制限にも拘わらず、その後、居留民数は増え続け、 15 世紀末には 1 万余戸を数えた。増長した居留民は、朝鮮官庁の統制に従おうとしなかったばかりか、1510 年 4 月には、三浦の海賊と共謀して暴動を起こした。朝鮮史上、この出来事は「三浦倭乱」と言われている。半月後暴動を鎮圧した李朝政府は、対馬と一切の関係を断絶する強硬措置を講じた。朝鮮との貿易を通じて莫大な

利益を得ていた対馬島主と商人、三浦を追われることになった居留民は苦境に陥り、外交関係の正常化と貿易の再開、居留民の引き続く在住を請願せざるを得なくなった。

李朝政府は、暴動の主謀者を厳罰に処することを要求し、1512 年、室町幕府の使臣が首謀者たちの首を切って持って来ると、なおも暴動の責任をきびしく追及し、二度と侵略行為を働かないようにさせることを誓わせた。そのうえで日本人の三浦居留を禁止し、貿易船数と貿易品目、数量を制限することを条件に貿易の再開を許した。（『壬申約条』）

対馬島主をはじめ日本の諸領主は、その後も毎年、貿易船数の増加を求めたが拒絶されると、これに遺恨を抱き、再び略奪行為を働きはじめた。

1544 年 4 月 12 日、対馬島主の差し金で 20 隻の海賊船が慶尚道固城(コソン)沖合の蛇梁(サリャン)島を襲撃したが、島を守る軍人と住民の反撃にあって駆逐された。

李朝政府は懲罰措置として、日本人居留民の待遇を引き下げるとともに、室町幕府の貿易船を徐く一切の日本船の入港を禁止した。その後、対馬島主が謝罪を申し入れ、禁止令の解除を懇請したため、1547 年、以前よりも制限された範囲での貿易を許可した。　（『丁未約条』）　こうして倭寇はしばらく鳴りをひそめていたが、1555 年、またしても朝鮮沿岸を荒らし始めた。この出来事は、史上「乙卯（1555 年）倭変」と呼ばれている。

5 月中旬から 6 月下旬にかけてほぼ 1 か月半もの間、朝鮮南海の島々と沿岸に侵入し、殺人、放火、略奪を働いていた倭寇は、朝鮮軍民の果敢な戦いにより、多数の死傷者を出して駆逐された。

度重なる倭寇の侵入は、強力な軍艦の建造と、水軍の強化を焦眉の急とした。

一方、100 余年にわたる戦国時代に終止符を打ち日本国土の統一を果たした豊臣秀吉は、勢いに乗じて無謀にも朝鮮と明の支配を夢見、朝鮮半島攻略の準備を急いでいた。

日本の企図を見抜いた李舜臣将軍ら朝鮮の軍人と人民は、何よりも侵略者を海上で撃破すべきだとして、不沈戦艦の建造に取り組んだ。こうして、彼らは伝統的な艦船建造技術と経験をふまえて、以前の亀甲船をより有力な軍艦につくりかえたのであった。

亀甲船は、1592 年、再びその雄姿を現し、実力を誇示する日の到来を待つことになった。

Ⅱ　亀甲船について

1　種　類

亀甲船にはおおよそ二つの種類があった。

1591 年、全羅左道水軍節度使（全羅道の左側水域を担当する水軍司令官）に任命された李舜臣将軍は、情勢に対処して全羅左水営（全羅左道の水軍基地）で亀甲船の建造を指導した。この兵船は左水営亀甲船と呼ばれている。

左水営亀甲船は、壬辰祖国戦争の初期に威力を遺憾なく発揮し、敵軍に大きな打撃を与えた。

左水営亀甲船は、竜頭の下部に鬼面が陽刻され、前部が一文字に切断された亀の甲のような形状の甲板は、正６角形の小鉄板で構成され、そこに剣先や錐が林立して、敵兵が踏み込めないようになっている。左右の舷側にはそれぞれ８挺の櫓があり、船体には多数の砲が備え付けられている。

1593 年、三道水軍統制使（忠清・全羅・慶尚 3 道の水軍司令官）に昇格した李舜臣は、実践上の経験をふまえて、統制営（3 道の水軍基地）で亀甲船を改造する措置を講じた。

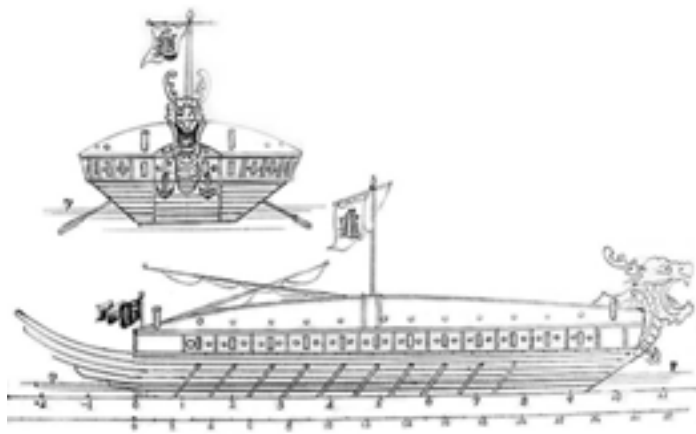
統制営亀甲船は、中世朝鮮の艦船建造技術の粋を集めたもので、軍事技術的にも戦闘力においても当代無比の兵船であった。亀甲船と言えば普通この兵船をさしている。

統制営亀甲船は左右にそれぞれ 10 挺の櫓を持つほか、折りたたみ式の 2 本の帆柱を有し、これを補助推進力として利用した。甲板は林立する剣先と錐の間に十字形の通路を設けており、また甲板と船室を結ぶハッチもつくられている。甲板は楕円形をなし、射撃口も以前のものより多くなり、その数は甲板の左右にそれぞれ 12、両舷側にそれぞれ 22 があった。

この亀甲船は、日本軍との海戦でつねに先頭に立ち、海上における不沈の要塞として絶大な威力を発揮した。亀甲船は戦後もひきつづき建造された。

これについては、1622 年、国王が亀甲船の建造を再開し、水軍の訓練を強化するよう指示したこと（『光海（クァンヘ）君日記』巻 179　14 年 7 月）、1791 年、慶尚左水使崔東岳（チェドンアク）が、楼船は速力が亀甲船より劣るとして、左水営管下には亀甲船が少ないため、10 隻の楼船中 3 隻を亀甲船に改造したいと進言し、これが受け入れられたこと(『正祖（チョンジョ）実録』巻 33　15 年 11 月)、1809 年、『李忠武（リチュンム）公全書』（忠武は李舜臣のおくり名）にもとづいて亀甲船が再び建造されたことなどの記録が残されている。

この時期の亀甲船は船体の長さが 21.74m、船尾は 12.16m 程であり、70 余門の砲が備えられるようになっていた。このように、戦後に建造された亀甲船は砲の配列に違いはあったが、以前のものと大差はなかった。

18 世紀まで、亀甲船は京畿（キョンギ）道と忠清道にそれぞれ 1 隻、慶尚道に 9 隻、全羅道に 3 隻、総 14 隻が配備されていた。しかしその後、事大主義的な封建支配層は、安逸をむさぼり国防をなおざりにしたため、ほかの兵船とともに亀甲船も国防力の強化に役立てられず、有名無実の存在になってしまった。

亀甲船の正面図及び側面図

２　船　型

閉鎖船型

　すべての創造物がそうであるように、亀甲船も技術者をはじめ人民が傾けた創造的活動とたゆまぬ努力のたまものであった。

　亀甲船についての記録を残しているのは、『李朝実録』『李忠武公全書』など壬辰祖国戦争後の史書である。とりわけ『李忠武公全書』はきわめて貴重な史書である。

　本書（1795 年編纂）は、壬辰祖国戦争第 1 段階の勝利 200 周年に際し、尹行恁（ユンヘンイム）によって編纂された書物を国王正祖が『李忠武公全書』と名づけ、柳得恭（リュトゥクコン）に命じて印刷させたものである。すべての物体の外形は直線または曲線によって囲まれたいくつかの面を持って構成され、立体をなしている。亀甲船

の船型は主に曲面の組み合わせから成り立っている。亀甲船の原型は亀であり、亀は曲面体の動物である。

『李忠武公全書』の「亀船頌」には、「その形は丸みを帯び、あたかも亀が日に当たっているような趣きである」と書かれている。原典に描かれている統制営亀甲船の図を見ると、甲板の周と中央部横断面の縁、船尾はいずれも曲線をなしている。

造形上曲線美が強調されるようになったのは、世界的には 20 世紀後半からであるが、朝鮮では古くから曲線美が追求され、その流れの中で亀甲船の船型も曲線を主調にして形成されたのである。ただ、肋骨だけは建造に便利な直線形にしている。

甲板は鉄板からなり、船の中からは外が見えるが、外からは内部が見えないようになっている。

このように、亀甲船は世界の水軍史上初めて現れた閉鎖型の兵船で、現代の潜水艦と同じような船型である。

亀甲船は、全長 35m、最大幅 11.8m、舷側の高さ 3.5m、最大船高約 5.2m という、大型のすぐれた軍船であった。亀甲船の出現より 100 余年後れて世界を 1 周したスペインの「ビクトリア」号は、全長 23m にすぎなかった。

簡易船型

船舶工学で言う簡易船型とは、船体を構成する骨組みと板材に曲線と曲面を極力避けた船型である。

造船に際して外板の平面の割合を高め、骨組みを直線化すれば、低速船の場合、労力と資材を節減し、建造日数を短縮することができる。船体の外皮が厚さ 120mm の板で構成された亀甲船の場合、板材と骨組みに大きな曲線・曲面を

持たせることは困難であるため、船首・船尾材と底板、肋骨は平面及び直線をなしている。

同一の排水量で喫水を最小にするためには、船底を平面にすべきである。

亀甲船は簡易船型に属するため、機動や海戦で非常に有利である。干満の差が大きい朝鮮南海と朝鮮西海では、喫水をできるだけ浅くすることが重要である。同一の排水量という条件で、簡易船型の軍船は喫水が浅いため干潮時にも支障なく機動できるが、非簡易船型の軍船は浅瀬では戦闘力を失う恐れがある。

亀甲船が日本水軍との戦いで威力を発揮した秘訣の一つは、それが簡易船型だったことにある。亀甲船は、水面下の部分の長さ（L）と幅（B）の比を大きく（L/B=3）取る一方、甲板の長さと幅の比を小さく取る（L/B=2.16）ことで船の速力を高め、他方木造の舷板を盾で防護して、海戦に有利な態勢を整えていた。

３　船　体

装　甲

亀は寿命が長く、300 年生きると言われる。朝鮮で艦船、とりわけ亀甲船を亀に似せてつくったのは、その堅い甲と寿命にあやかってのことであった。建造者たちは、堅固な不沈戦艦を構想し、船に亀の甲のような装甲を施して亀甲船と呼んだのである。

人類の戦史は攻撃と防御の歴史であった。

戦争の勝敗は攻撃と防御をどう結びつけるかによって決まる。イギリスで最初につくられた戦車の装甲の厚さは 10㎜ で、1917 年 11 月、カンブレーの戦いに出現し、ドイツ軍陣地の突破で威力を発揮した。

亀の甲は強力な防御手段であり、軍事的見地からすると要塞化の象徴だといえる。

この亀の甲に似せてつくられた亀甲船は防御はもとより攻撃でもいかんなく威力を発揮し、朝鮮水軍は日本水軍に連戦連勝したのである。

当時の日本の史書『征韓偉略』には、敵船は全船体が鉄で覆われているため、わが方の砲はこれを破壊することができなかった、と記されている。

亀甲船は、木船から鉄船に移行する過渡期型の船である。

亀甲船は、木造の船体に装甲を施し、舷側にも鉄の盾を取り付けていたため、矢はもとより銃砲弾にも破損されず、接舷戦でも砲撃戦でも敗北を知らぬ「装甲船」の威力を発揮したのである。

亀甲船がただの木船であったなら、数倍も優勢な日本水軍と戦って連勝することはできなかったであろう。亀甲船は焼き打ちも利かず、砲をもってしても破壊できなかった世界最初の鉄甲船であった。

ヨーロッパでは、16 世紀に砲が多層甲板型帆船の主要兵器となってから、1782 年、スペインとフランスの連合艦隊が敵の砲弾から艦船を守るため舷側に鉄板を張り付けたことで鉄甲船の歴史が始まったとされている。ロシアでは、1834 年に鉄製の軍艦を建造し、これを世界最初の鉄甲船だとしている。

竜　頭

竜は、朝鮮の遠い昔から、英知と勇猛を象徴する想像上の動物として、造形芸術分野の建築物、寺院の丹青（彩色画）や古墳壁画などにさまざまに描かれてきた。亀も竜と結び付けて描かれることが多かった。

亀甲船の竜頭

平安南道江西（カンソ）郡三墓（サンミョ）里にある 7 世紀中葉の高句麗（コグリョ）壁画古墳江西三墓には、長い歳月を経た今日も色の褪せていない四神図がある。

東西南北の壁面に青竜、白虎、朱雀、玄武を描いたもので、玄武の均整のとれた姿態と繊細な甲の模様はあたかも生きている亀を思わせる。それでいながら頭は亀というより、敵を襲おうとする竜に擬せられている。亀甲船には、このような民族的伝統にちなんで、へさきに竜頭が取り付けられている。　亀甲船の竜頭は、艦の威容を際立たせて敵を威圧する一方、口から煙を吐き出して敵兵の目をくらます、世界海戦史上最初の煙幕発射装備でもあった『李忠武公全書』には、この竜頭について次のように記されている。

「へさきには竜頭が取り付けられ，その長さは４尺３寸（1.28m）、幅は３尺（0.9m）である。船中で硫黄と煙硝を燃やし、口を開くと霧のような煙が吐き出されて敵の目をくらませる。……竜頭の上部には二つの射撃口が、下部には二つの出入り口があり、その両側にも射撃口が一つずつある」

竜頭の口は、ふだんは閉ざされており、戦闘が始まると開くようになっている。

船　尾

亀甲船のともには 2 本の尾が取りつけられており、これによって、船の揺れを小さく抑え、速力を高めるよう工夫されている。

世界の戦史を振り返ると、火薬兵器の出現後、海戦でも砲撃戦法が導入されるようになり、そのため、艦船は旋回より速力のほうにより大きな注意が向け

られ、船形は次第に細長いものに改造されてきた。だからといって船の長さをむやみに伸ばすわけにはいかない。船体が長いと、船が波の上や谷に乗る場合、中心垂直面の左右に作用する力のモーメントで胴体が割れる危険があるからである。

亀甲船に 2 本の長い尾を取りつけたことは、以上の二つの難点を同時に解決した工夫であった。

4　設備と建造法

設　備

亀甲船の設備は錨、舵、櫓、帆、係留手段などである。

錨は左右の舷に一つずつあり、鎖の全長 75m、直径 19㎜、錨の重さは合わせて 462kg であった。錨の上げ下ろしは手動式ウインチによっておこなわれる。

中世の船舶は舵を船尾の甲板上に設けるのが普通で、亀甲船の場合も同様であった。舵部の総重量は 378kg である。

櫓は左右の舷側にそれぞれ 10 挺ずつ据えられ、帆柱は２本である。

明の華鈺は軍事技術書『海防議』に、「朝鮮の亀甲船は帆を自在に立てたり寝かせたりできるので、向かい風や引き潮にも妨げられず自由に航行できる」と書いている。

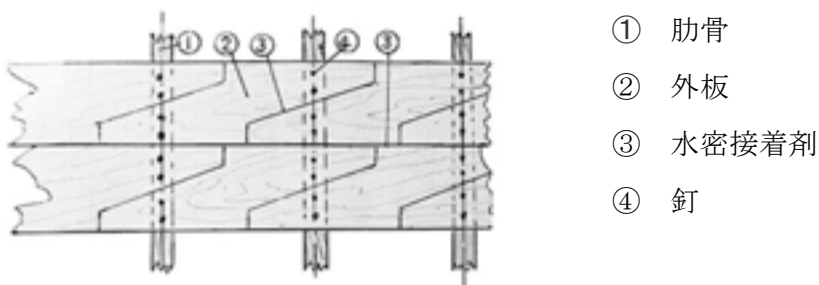
このように帆柱は折りたたみ式になっていて、交戦時にはたたまれ、普通の航行時には立てられた。そのほか、船首と船尾の左右の舷に 2 本ずつ、計 4 本の木製係留棒が据え付けられてある。

建造法

前述のように、亀甲船の建造では科学技術および軍事上の問題点がすべて立派に解決されている。亀甲船の威力即ち堅固さとすぐれた航行力、強力な攻撃および防御力は、艦船建造技術に負うところが大きい。

亀甲船の建造法は、一般の木船建造法とは根本的に異なっている。とりわけ厚板同士および板と肋骨の接着法が独特で、接着剤には特殊なものが用いられていた。

亀甲船の建造では大串(だいかん)造法という接着法が使用されている。これは蒸して曲げた板を鉄釘で継ぎ合わせる従来の方法とは異なり、長さ 3～4 尺(90～120cm)の板に穴をあけ、鉄釘と木釘を用いて継ぎ合わせる船体施行法である。亀甲船の舷板の厚さは 4 寸(約 12cm)である。このような厚い板を蒸して曲げ、船体を組み立てるということは不可能であり、また、縦、幅、高さ方向に厚板を同時に湾曲させ、しかも継ぎ目をきちんと合わせることは非常に難しい。そこで舷側の曲率の大小にかかわりなく、厚板を細かく切り分け、それらを適当に継ぎ合わせていくことで必要な曲率を持たせて船体を組み立てたのであるが、これは実に奇抜な着想であった。図には、大串造法による舷板組立図が示されている。

① 肋骨
② 外板
③ 水密接着剤
④ 釘

今も木船の舷板の厚さが最高 40㎜ に制限されているのは、それ以上厚くなると板材を曲げることが難しいからである。船の各面は縦、幅、高さの各方向に湾曲しており、これを実現するには板材を蒸して曲げを持たせることになるが、板が厚くなるに従ってこれが次第に困難になる。そこで外板の厚さが制限されざるを得なくなるのである。

亀甲船の場合、舷板の厚さを 120㎜ にまで高めることができたのは、舷板造りで曲げ工程が省かれたからである。この省略は、木船の建造では独特な工法であった。大串造法の導入によって、舷板に厚板を用いることが可能になり、ここで曲げ作業が省かれるので、施工速度が高まり、作業も楽になった。

一方、昔も今も、造船用木材は次のような技術的要請を満たすものでなければならないとされている。

第１、表面および内部に一切欠陥がないこと。

第２、加工性にすぐれていること。即ち製材、切断、かんな作業などが容易であること。特に大串造法では多くの鉄釘と木釘が打ち込まれるので、穴のあけやすい木材でなければならない。

第３、節がなく木目が一定していること。等方性である鉄とは違って、木は異方性である。言い換えると、木は細胞が厚い膜で包まれており、材質はこの細胞膜の構造によって定まるのであるが、細胞の配列の違いによって方向毎に強度の差、つまり異方性が生ずるのである。

朝鮮では、古くから以上の点を考慮して、木船建造用にはエンジュ、モミ、ニレ、マンシュウグルミなどの木材が多く用いられた。

亀甲船の建造において接着剤は、隙間を塞ぎ浸水を防ぐ不可欠の材料であった。主材質は石灰であり、その主成分は炭酸カルシウムである。

石灰石が豊富な朝鮮では、古代から多くの分野で石灰が広く利用された。例えば、古墳の石壁の隙間を塞いだり、墓を補強することに石灰が多く用いられ

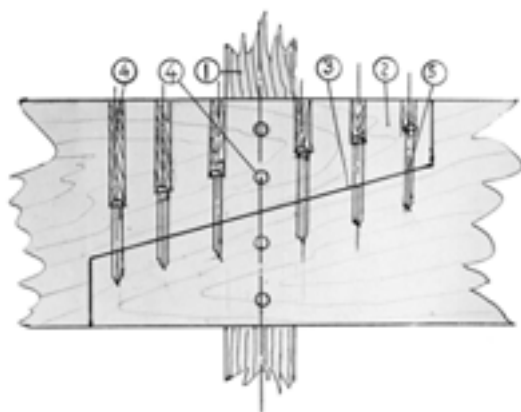
た。石灰は歳月が経つにつれてますます固さを増し、防水作用も強力になるのである。

石灰には生石灰と消石灰がある。生石灰は水酸化物、炭酸塩またはカルシウムの化合物を熱分解してつくる。この生石灰に水を加えると消石灰になる。

亀甲船の舷板の継ぎ目を塞ぐのには、水で練った消石灰を板の表面に吸着させる方法でおこなわれた。木と石灰の吸着、これは亀甲船の建造に際して開発された方法である。現在のセメント被覆による木材の腐食防止工法は、これに源を発している。

亀甲船建造法のいま一つの特長は、鉄釘で接合をおこない、木釘をさらに打ち込んで鉄釘の腐食を防止するようにしたことである。

亀甲船の建造に使われた板は非常に厚く、幅も 300㎜ 以上である。このように厚く幅の広い板材を木釘で接合することは不可能であり、直径が 10㎜ 以上の太い鉄釘を使わなければならなかった。

昔から、海水による鉄釘の腐食は避けがたいものとされてきた。鉄釘が腐食すると接合強度が著しく弱まり、船は破壊を余儀なくされる。このような欠陥を除くため、亀甲船の建造では鉄釘の外側に木釘をさらに打ち込んで鉄釘と海水の接触を遮ったのである。図には、木釘と鉄釘の施工図が示されている。

①　肋骨

②　外板

③　水密接着剤

④　木釘

⑤　鉄釘

亀甲船の建造ではまた、木材の表面をいぶす炭酸ガス化の工程があった。消石灰の硬化は炭酸ガスの作用によるものである。

消石灰 $Ca(OH)_2$は大気中で CO_2と化合して $CaCO_3$になるが、この反応は非常に緩慢に進む。それは、大気中の炭酸ガス CO_2の濃度がわずか 0.03％にすぎないからである。

そこで亀甲船の建造では、消石灰の硬化を早めるため、炭酸ガス化即ち板材を煙でいぶして炭酸ガスを発生させる方法を工夫したのである。亀甲船の舷板を煙でいぶし、石灰で継ぎ目を塞いだことは、多年にわたる探求と実践が生んだ成果であった。

亀甲船の建造法について、日本の史書『朝鮮役水軍史』には、亀甲船はその上、板で船を組み立てる際、独特な施工術を用いたため非常に堅固であった、即ち、長さ３～４尺の厚い板に穴をあけ、それを継ぎ合わせる大串造法で建造し、また板の接触面には密着剤を塗ったので、あたかも陶磁器の表面のように水の浸み込む隙間がなかった、と記されている。

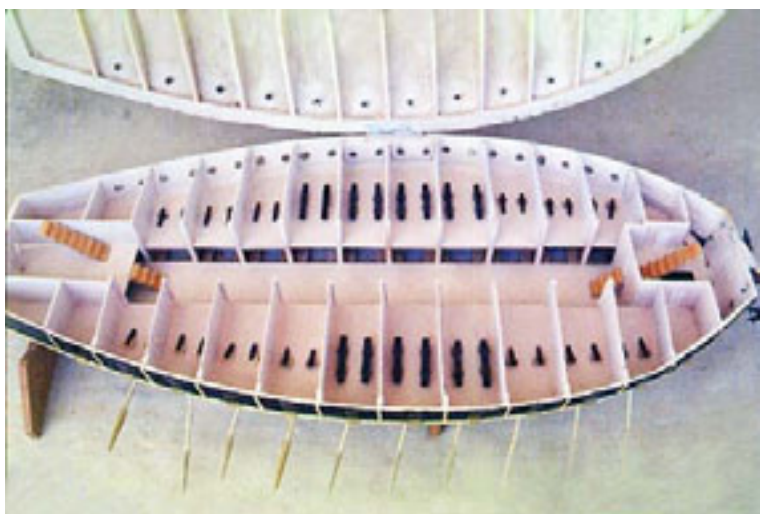
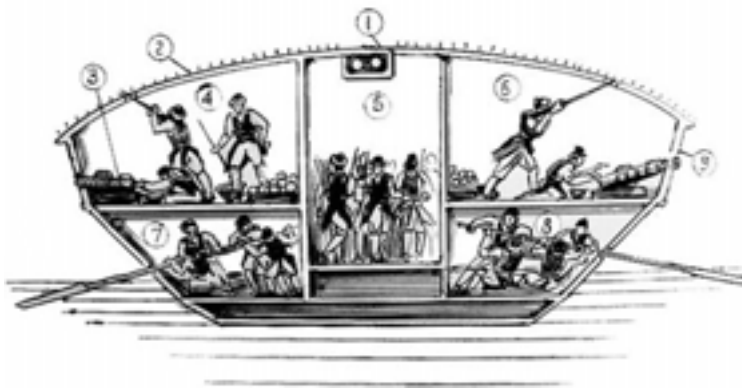
５　船内の配置と性能

『李忠武公全書』には、亀甲船の船内配置に関する次のような記述がある。

「左右の舷に設けた欄干を信防と言い、欄干の前側に付けた横木は加竜と言う。この加竜はへさきに取り付けてあるので、あたかも牛馬の首にくびきを掛けたもののように見える。欄干(信防)に沿って板を敷き、また欄干に牌(盾)を立て巡らし、その上にいま一つの欄干を設けているが、これを偃防と言う。信防から偃防までの高さは４尺３寸(1.28m)である。……

下層には板敷きの部屋が左右にそれぞれ 12 室あり、そのうち２室には各種金物、３室には砲、弓矢、槍、刀剣などが別々に保管されており、残りの 19 室は兵卒の休憩室になっている。上層の左側には板敷きの船長室、右側には同じく板敷きの将校室がある。兵卒は休息時は下の部屋で過ごし、戦闘時には上層にあがって来る」

「左右の牌にはそれぞれ 22 の射撃口と 12 の出入り口が設けられている。竜頭の上部には二つの射撃口、下部には二つの出入り口があり、その両側にも射撃口が一つずつ設けられている。左右の板で覆った箇所にもそれぞれ 12 の射撃口があり、……『亀』という文字入りの旗が立っている」

図は、原典に照らして作製した船内の配置図である。

亀甲船の横断面

① 鉄甲板
② 錐
③ 砲
④ 砲室
⑤ 廊下
⑥ 砲室
⑦ 兵室
⑧ 兵室
⑨ 盾

亀甲船の縦断面

原典の解説からもわかるように、亀甲船の内部は航行と戦闘に支障のないよう各室が便利に配置されている。

陸地とは異なり、海上で戦う艦船は、日常生活と戦闘に必要なすべての備品が整っていなければならないのであるが、限られた空間にすべての必需品と戦闘機材をもれなく置くには、船室の配置が適切でなければならない。

亀甲船は内部が上下２層に仕切られ、昇降口が二つ設けられている。各室は今日の塹壕のように通り抜けることができ、戦闘時に移動や指揮、命令の下達が迅速におこなわれる。また、各室は船長、将校、兵卒など階級別にそれぞれ割り当てられていた。

船の前後左右には計 72 の射撃口を設け、火力密度を最大限に高めているが、これは、装薬時間を計算に入れたうえで、連続射撃が可能なように工夫されたものである。こうした配置は、中世の海戦に適合したものであったが、当時はまだ世界のどの国の艦船にも見られないものであった。亀甲船のこうした船内

配置は、朝鮮民族の規則正しい生活、几帳面でそつのない仕事ぶりを反映したものであり、船の性能向上にも役立った。

船の性能は復元性、航行性、旋回性によって評価される。

復元性とは、傾いた物体が元の位置にもどる性質である。その代表的な例は起き上がり小法師で、倒れてもすぐ起き上がるのは、重心が底部にあるからである。

一般の船舶を含めて艦船の復元性は性能の重要指標の一つとされている。亀甲船は猛烈に動きまわり体当たり戦法を多く用いる関係で、復元性はとりわけ重要な問題であった。

船の復元性を高めるためには、重心ができるだけ船底近くに置かれるようにしなければならない。先にも述べたように、亀甲船は下の層に武器弾薬が保管され、兵卒の休憩室もそこにあったので、重心は船底の上 1.4～1.5m あたりにあった。

戦闘時に兵卒が上の層に上がって行っても、下の層には漕ぎ手とさまざまの戦闘機材、生活必需品が貯蔵されているので、重心の位置はさほど変わらなかった。

計算によると、亀甲船は空船の状態でも重心は船底から 2.7m の位置にあり、高さ 5.2m の船にしてはかなり低いと言える。

さらに、亀甲船は簡易船型であるため、引き潮の時でも暗礁に乗り上げることなく航行でき、揺れも少ない。それは、舷側の外板が横揺れに大きく抵抗して振幅を小さくし、船尾の形態も縦揺れを減らしたからである。こうした特性のおかげで銃砲の命中率は一段と高まった。また、鳥の尾のような船尾の外板は、航行方向の安定性を高めた。船の航行性とは、船速をはじめ船の運航に必要な性質のことである。

亀甲船は、当時の船としては速力が非常に大きく、浅海でもスピードが落ちなかった。その上、左右にそれぞれ 10 挺の櫓があり、１挺の櫓に４人、計 80 人の漕ぎ手がつくため、帆を上げなくてもかなりの速力を出すことができた。亀甲船の主要な推進手段は櫓であり、帆は補助的な手段であった。遠い昔から今日に至るまで、櫓はもっとも簡便で安全かつ確実な推進手段とされている。

亀甲船の通常の航行速力は約 4.27 ノットであるが、戦闘時にはその 1.5～1.7 倍即ち 7 ノットほどまで上げることができた。これは 16 世紀当時、世界の艦船の中で群を抜くものであった。ロシアの『船舶百科辞典』によると、18～19 世紀のヨーロッパで櫓を推進手段とする艦船は、全長 35～40m、櫓数 50～60 挺の場合、最高速力は５ノットであった。

艦船の旋回性は航海時、特に海戦の際に重要な問題となる。

艦船の旋回性とは、航行時に進路をどれほど速く変えうるかという性質であり、それは旋回半径によって規定される。

当時の船の旋回手段は舵と帆、それに舷側推進装置としての櫓であった。亀甲船はこのような旋回手段をすべて備えていた。亀甲船は船楼即ち船の上部構造を省き甲板を装甲しただけの兵船であったので、風の当たる面積が非常に小さく、旋回時に風圧をさして受けない。帆柱も折りたたみ式で戦闘時にはたたまれているので旋回に支障をきたさなかった。このように亀甲船の場合旋回性はたいして問題とならず、それだけ前後左右の火力密度を高め、視界と射界を広める問題も解決できたのである。

このように亀甲船は、船内配置に深い考慮が払われ、きわめて高い性能を持つ強力な戦艦であった。

Ⅲ　装備と戦法

1　装　備

武　器

人類の発生後、自然征服の道具として出現した武器は、次第に戦争に利用されるようになった。中世における火薬の発明は、武器の改良に画期的な前進をもたらした。

それまでの海戦は、舷と舷を接して相手側の船に飛び移り、敵味方が入り乱れて槍や剣、弓矢をもって戦う仕方でおこなわれた。これを接舷戦という。ところが、火薬と砲が出現してからは、海戦は砲撃戦へと移行した。

亀甲船が装備していた各種火器は、三国時代から受け継がれてきたものをさらに発展させたものである。火薬の発明と火器の発達は密接につながっていた。

朝鮮では三国時代から火薬が研究・使用され、14 世紀、高麗（コリョ）の崔茂宣（チェムソン）によって完成した。1373 年 10 月に火薬の主成分である焔硝に硫黄を混ぜ合わせて良質の火薬をつくることに成功した崔茂宣は、1377 年 10 月、政府に提議して火筒都監を設け、ここで各種の砲や砲弾、火矢などを大々的に生産した。

兵船に火器が備えられたのは、亀甲船が出現する 33 年前、高麗末の 1380 年であった。

1380 年の津浦（チンポ）沖の海戦について、『高麗史』巻 114（列伝、羅世）には次のように記されている。

「1380 年 8 月、沈徳富（シムドクプ）と崔茂宣は火砲を備えた 100 隻の軍船をもって、津浦沖に侵入した 500 隻の日本船に火を放ち撃滅した」

津浦沖の海戦は、世界の海戦史において火砲による火力機動戦術及び海上砲撃戦の端を開いた海戦であった。

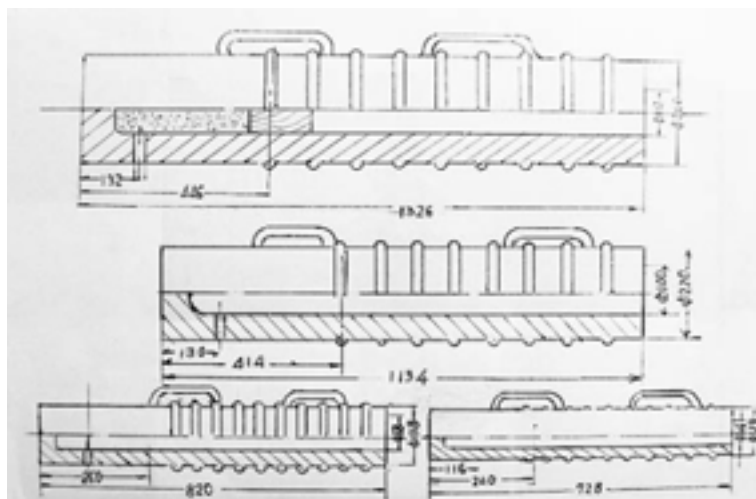
記録によると、ヨーロッパでは、1571 年のレパント沖の海戦(スペイン・ベネチア・ジェノアの連合艦隊とトルコ艦隊との戦い)ではじめて砲撃戦がおこなわれている。また、火力機動戦術がはじめて用いられたのは、1790 年、ロシアのウシャコーフがトルコ艦隊を撃破したケルチ沖の海戦においてであった。だから、津浦沖の海戦は世界最初の砲撃戦であったと言える。

亀甲船の火器は、高麗のそれをさらに改良したもので、天字銃筒、地字銃筒、玄字銃筒、黄字銃筒、小勝字砲、大勝字砲、蒺藜（しつれい）砲、大発火、大碗口、中碗口などの銃筒（砲）、それに長片箭、鉄弾丸、大将軍箭、将軍箭などの弾丸が使用された。このほか、鳥銃や双穴銃筒も備えられていた。

『李忠武公全書』には次のような記述がある。

「亀甲船からは天字銃筒、地字銃筒、玄字銃筒、黄字銃筒など各種の銃筒を発射し、わが方の艦船からは地字銃筒、玄字銃筒、蒺藜砲、大発火などが連射された」

天字銃筒は中世朝鮮における最大の砲であった。これは、細長い流線型の弾丸（大将軍箭）または鉛をかぶせた丸い鋳鉄弾を砲口に詰めて、平射する砲であった。

天字銃筒、地字銃筒、玄字銃筒、黄字銃筒などの名称は、『千字文』の最初にある「天地玄黄」の文字を取ってつけた銃筒の番号名である。図には、これらの銃筒の構造と寸法が示されている。

亀甲船の砲の構造

上：天字銃筒、中：地字銃筒、下：玄字銃筒（左）、黄字銃筒（右）

主な弾丸は長片箭である。これは現在のロケット弾に似た形を持つ長さ 3.6m 強、直径 0.077m の木製の筒で、長さ 1.2m ほどの鉄板翼 3 枚と長さ 0.909m の鏃（弾頭）がついていた。銃筒は船の上層部に据えられ、射程はおよそ 5 町（545.4m）であった。

蒺藜砲は高麗時代から使用された武器で、木製の円筒と蓋からなっていた。筒の中には地火筒と小発火筒が並んで立てられており、そのまわりには黒色火薬（焔硝）が、火薬筒の上部には小鉄片が、さらにその上にはヨモギの葉が詰められた。

発射原理は次の通りである。導火線に火をつけると、まず小発火筒に引火してガスが発生し、その反動で地火筒（弾丸）がわずかに押し戻され、これに小発火筒の火が燃え移り、火薬が燃え出す。内部の圧力が増大して蓋が開くと圧力は再び弱まるが、火薬は燃えつづけ、火の玉となった弾丸が発射される。弾丸が目標に当たると、破裂して鉄の破片を吹き飛ばす。

碗口は、時限爆弾に相当する震天雷またはまるい石弾を砲口に詰め、曲射する砲である。亀甲船には以上のほか、銃や弓矢などの武器も備わっていた。

盾

盾は遠い昔から防御武具として用いられ、その間いろいろと改良が加えられて今日に至っている。

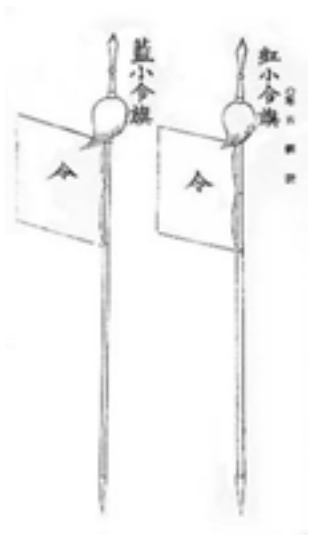
盾には持ち盾と置き盾（装甲を含む）の 2 種があり、置き盾は集団防御用のものである。亀甲船の盾は装甲であった。これについては先に説明した。

当時、船体に装甲を施したのは、水軍史上特記すべき出来事であった。亀甲船の装甲は独特な方法で施されている。

当時の技術では、厚さ 50㎜ 以上の鉄板を溶接して船体に装甲を施すことは不可能であった。そこで、亀甲船の建造では、厚い鉄板を相互にとめながらモザイク式に継ぎ合わせる方法が用いられた。装甲は甲板と左右の舷側、船首に施されており、矢や銃弾はもとより、砲弾もこれを破ることができず、火矢をもって炎上させることもできなかった。

信号システム

中世の海戦において、軍艦相互間の信号は軍旗によっておこなわれた。

亀甲船の信号システムは非常に緻密かつ厳格なものであった。信号旗には令牌、督戦旗、小令旗、行旗、五方神旗などがあった。

亀甲船の藍小令旗と紅小令旗

令牌は大将（提督）の命令を下す信号旗で、前面には「令」という文字と豹の前姿が、後面には「大將」という文字と豹の後ろ姿が描かれていた。

督戦旗には「凡軍臨敵不用命者處斬」という文字が書かれていた。これは、敵との戦いで命令に服従しなければ斬に処するという意味で、軍律の厳しさを示している。

小令旗は命令用の信号旗で、紅小令旗と藍小令旗とがあった。

行旗は、黒字に白色で「行」と書かれた総突撃信号旗で、船尾に掲げられた。

亀甲船の信号旗

亀甲船の行旗

五方神旗は、５匹の想像上の動物（黄竜、青竜、白虎、朱雀、玄武）を描いた信号旗で、艦船の移動方向を示した。黄竜旗は中央方向、朱雀旗は前進、青竜旗は左方に機動、白虎旗は右方に機動、玄武旗は後退を意味した。

亀甲船は、このような信号システムを通して旗艦の意図を瞬時に伝達して、戦闘を有利に進め、常に勝利をおさめることができたのである。

２　戦　法

砲撃戦法

亀甲船は、海戦の際には常に先頭に立って敵船を撃破した。

亀甲船の基本戦法は砲撃戦法であり、これにふさわしい高度の火力密度を有していた。

当時の砲は、火薬と弾丸をこめ、そのあと火薬に火をつけて爆発させ弾丸を発射する仕組みになっていたため射撃速度が高くなく、射程も短かった。

亀甲船は、このような短所を砲数を増やすことで補った。

前述のように、亀甲船は前後左右に総 72 の射撃口が設けられているが、これは砲の装薬時間を計算に入れ連続発射が可能なように工夫されたものである。

また、射程の異なる各種口径の砲を備えていたので、向かって来る敵船も、逃げる敵船も砲撃することができた。

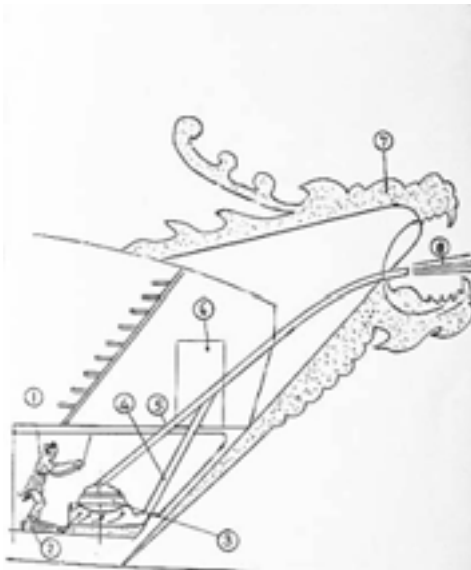
『李忠武公全書』には、「敵は、船に乗り移っても、甲板に立てられた剣先や錐に刺され、包囲して攻めかかろうとしても、前後左右から一斉射撃を浴びるため接近することができなかった」と記されている。また、1598 年 11 月 19 日の鷺梁(ロリャン)沖海戦については、「まず亀甲船を敵船のまっただなかに突入させ、天字、地字、玄字、黄字など各種の銃筒を撃たせた。……　雨あられと降り注ぐ砲弾の爆音は天地を揺るがした。傷つき倒れ、右往左往する敵兵の数は数えきれなかった」と書かれている。

このように強力な火力を備えていた亀甲船は、大小の海戦で常に先頭を進み、朝鮮水軍は連戦連勝したのである。

煙幕戦法

亀甲船の攻撃戦法の際立った特徴の一つは、世界で初めて独特な煙幕戦法を用いたことにある。

前述のように、亀甲船のへさきにある竜頭の口から吐き出される火焔と煙は、敵兵の目を痛めつけ、こちらの船の姿を隠すためのもので、硫黄と焔硝を焼いて発煙させるようになっていた。

① 兵卒
② ふいご
③ 釜
④ 煙筒
⑤ 煙幕管
⑥ 密閉箱
⑦ 竜頭
⑧ 煙

亀甲船の煙幕装備原理図

焔硝は燃焼の際黒煙を出す火薬であり、硝酸カリウム、硫黄、木炭などの粉末を一定の割合で混ぜて製する。硝酸カリウムを酸化剤、木炭を可燃剤、硫黄を点火促進剤とするこの黒色火薬は、燃焼速度が大きい反面、爆発力が弱く、1890 年に発明された無煙火薬即ち爆薬とは区別される。

焔硝は朝鮮で発明された火薬であるが、その時期は定かでないが、化学兵器である光耀が使用された 661 年以前であったことには間違いない。古代朝鮮の医書には、火薬の主成分である焔硝は薬剤として利用される、と記されている。したがって高麗時代の崔茂宣による火薬の発明は火薬の再発明であったと言える。

亀甲船から吐き出される黒煙は敵兵の目を曇らせ、その不快な臭いは呼吸困難を起こさせた。古代ローマ時代に敵船を焼き討ちするため燃焼物（松ヤニ）を投じたという記録はあるが、亀甲船のように煙幕を攻撃手段として利用した例はなかった。

史実によれば、ロシア海軍は 1914 年 11 月、イギリス海軍は 1915 年 3 月、ドイツ海軍は 1916 年 4 月に初めて煙幕戦法を用いている。

体当たり戦法

亀甲船の戦法の第 3 の特徴は体当たり戦法である。

砲が出現する前の海戦は先にも述べたように、接舷戦が主であった。

亀甲船は接舷戦から砲撃戦へ移行する過渡期型の艦船で、接舷戦と砲撃戦を併用した。

亀甲船の接舷戦は独特なもので、まず敵船を体当たりによって破損させ、敵兵を右往左往させたうえで砲撃を加えもし、接舷戦もおこなったのである。接舷戦と言っても、亀甲船の甲板には一面に剣先や錐が林立しているため、敵兵は飛び移ることができなかった。それに亀甲船は極めて堅固で、体当たりをしても損傷を受けることがなかった。

亀甲船の体当たり戦法について、『李忠武公全書』には次のように記されている。

「敵船に遭遇すると、とまで錐と剣先をおおい隠し、先頭に立って進んだ。敵兵が乗り移って来ても、剣先や錐のため動きがとれない。それに亀甲船に近寄れば一斉射撃を浴びるので、敵は手も足も出なかった。こうして大小の海戦であげた戦果は多大であった」

「まず、亀甲船が多層船の底部に体当たりし、竜口から玄字弾を撃ち出し、天字、地字の大将軍箭を放って敵船を撃破した」

「突撃兵を乗せた亀甲船はまた、多層船の下層部に体当たりし、砲弾を浴びせてこれを破壊した」（当時の日本軍船は多層船であった）

亀甲船の体当たり戦法は、高麗時代から用いられていたものであった。

日本の史書「小右記」には高麗の戈船は船首に鉄の角を持ち、敵船を突き破るようになっていた、……それは、敵船に突進し、鉄の角で喫水部を突き破って致命的打撃を与えた後、敵兵と戦う独特な戦法を用いた、と記されている。

この衝角戦法は、古代のギリシアやローマでも用いられた例がある。

このように亀甲船は、砲撃戦法、煙幕戦法、体当たり戦法を駆使して戦った強力な軍艦であった。

Ⅳ　壬辰祖国戦争と亀甲船

1　壬辰祖国戦争と朝鮮水軍の活躍

壬辰祖国戦争は、1592 年から 1598 年にかけて、日本軍を相手取って繰り広げた朝鮮人民の反侵略戦争であった。壬辰（1592）年に始まったので朝鮮ではこう呼ばれており、壬辰倭乱とも言われている。

英知ある勇敢な朝鮮人民は、極悪な日本侵略軍を相手に正義の戦いを繰り広げ、祖国の尊厳を立派に守った。

当時、日本では 100 余年にわたる戦国時代が終わり、全国土を平定した豊臣秀吉はその勢いを駆って、朝鮮と明の征服を企てた。隣国を侵略して領土を拡大し、先鋭化した日本国内の社会的・階級的矛盾を緩和しようとしたのである。

日本軍は、1592 年 4 月 13 日、15 万 8,700 名の陸軍と数万名の水軍をもって不意に朝鮮侵攻を開始した。朝鮮人民は、祖国を防衛し、民族の自主権を守るため果敢に立ち上がった。

壬辰祖国戦争は大きく 3 段階に分けて見ることができる。

第 1 段階は、1592 年 4 月、日本軍が釜山に上陸した時から、1593 年 6 月、朝鮮の軍民が国内深く入り込んだ侵略軍を各地で撃破し、慶尚（キョンサン）道南端の狭い地域に追い込んだ時までの期間である。

日本軍は、陸軍を主力とし、水軍は朝鮮水軍を南海で制圧したあと、朝鮮西海に沿って北上し、陸軍と合流して朝鮮全土を占領するという水陸並進戦略を画策した。

釜山、東莱（トンレ）の愛国的軍民は、激烈な抗戦を繰り広げたが、圧倒的に優勢な日本軍は釜山と東莱を落とし、梁山（リャンサン）を攻略したあと、東・中・西の 3 路に分かれて北上した。

李朝政府は、忠清・全羅・慶尚３道が接する小白（ソベク）山脈一帯で侵略軍を阻止すべく、兵力を中路に集中させた。しかし、この作戦は上部の意図通りに進められず、申砬（シンリプ）をはじめ指揮部の戦術上の失策も重なって、日本軍の進撃を阻止することができなかった。

敵軍はソウルを落とし、国内深く攻め込んだ。

李朝の支配層は、軍民の高い士気に依拠して漢城（ソウル）を防御すべきであったが、日本軍が迫ると国都を捨て、北へ逃避した。優勢な日本軍は、西路

では６月中旬に平壌(ピョンヤン)を占拠し、東路では７月、現在の咸鏡(ハムギョン)北道地域まで進撃した。

戦争初期侵略者が広大な地域の占領に成功したのは、李朝政府がそれまで国防をないがしろにした結果、軍政が極度に乱れ、軍隊が弱体化していたからである。

そうした状況の下でも、侵略者は朝鮮の奥深くに進めば進むほど、強まる朝鮮軍民の抗戦に苦しみ、３路に分かれていた諸部隊は各自包囲されて相互の連係が保てず、補給物資の供給もむずかしくなっていた。海陸両面における朝鮮軍民の戦いは激しさを増し、戦局は日本軍に不利に変わっていった。

李舜臣将軍の指揮する朝鮮水軍は、1592 年５月初め、玉浦(オクポ)沖その他の海戦で 44 隻の日本兵船を撃沈し、多数の敵兵を殺傷する戦果をあげた。この第 1 次出陣についで、5 月末～6 月初めの第 2 次出陣では、亀甲船を先頭に立てて猛攻をかけ、泗川(サチョン)沖、唐浦(タンポ)沖の海戦などで 32 隻の敵船を撃沈、撃破し、10 余名の敵将を含む数千の敵兵を殺傷した。7 月初めの第３次出陣でも、「閑山(ハンサン)島大捷」として広く知られた閑山島沖の海戦と安骨浦(アンゴルポ)沖の海戦で敵船 101 隻を撃沈、撃破し、9,000 余の敵兵を殺傷した。

このように日本軍の水陸並進策を破綻させ、制海権を握った朝鮮水軍は、日本陸軍の背後を脅かし、戦局を朝鮮側に有利に転換させた。

陸地では散り散りになっていた兵士たちが人民と結んで義兵部隊を立ち上げ、至る所で敵軍に強力な打撃を加えた。これら諸義兵部隊の愛国的闘争は、水軍の輝かしい勝利と並んで、敵の攻勢を挫折させるうえに大きな役割を果たした。

陸地での反撃に呼応して、李舜臣将軍が率いる三道水軍（慶尚・全羅・忠清３道の水軍）の連合艦隊は、９月１日、釜山沖の海戦で 100 余隻の敵船を撃破

して閑山島大捷につぐ大勝利をおさめ、日本軍の水陸並進策を完全に破綻させた。

1593 年初め、朝鮮軍は全戦線に渡って反撃に転じた。

同年 2 月 6 日、李舜臣将軍の指揮する全羅左水営艦隊は、閑山島沖で慶尚道水軍と合流し、さらに2月 8 日には全羅右水営の艦隊とも合流して温川（オンチョン）島沖に進出した。ここで水軍の陸戦隊は熊川（ウンチョン）に上陸し敵の陣営を攻撃した。これは中世の水軍戦史上たぐいまれな戦法であり、水軍の兵法を発展させるうえで大きな意義があった。

甚大な打撃をこうむった日本陸軍は、7 月、慶尚道の狭い海岸地域に追い込まれた。ここで両軍は休戦状態に入り、戦争は第 2 段階を迎えることになった。

この戦争の第 2 段階は、1593 年 6 月の晋州（チンジュ）城防御戦闘後、日本軍が再び大攻勢をかける前の 1597 年 1 月までの期間である。

晋州城を陥落させはしたものの、ここで甚大な損失をこうむり窮地に陥った日本軍は、やむなく「講和交渉」を申し出たが、その裏ではなんとしても守勢を挽回し、朝鮮征服の野望を実現しようと画策した。ここで講和交渉に大きな期待をかけた李朝政府内一部官僚の優柔不断な態度は、日本の傲慢さに油を注いだ。

他方、狡猾な日本側の企図を見抜いた朝鮮人民は、さまざまの強力な新兵器をつくり、各地で城を新築・修復していった。休戦期間、朝鮮の戦力は量質ともに著しく増強され、ここに日本軍の再侵攻を阻止し、戦争の最終的勝利を裏付ける物質的条件が整った。

戦争の第３段階は、1597 年１月、兵力を増強した日本軍が再び大々的な侵攻を開始した時から、翌 1598 年 11 月、朝鮮水軍が鷺梁（ロリャン）沖の海戦で日本軍に壊滅的打撃を与えた時までの期間である。

「講和交渉」の舞台裏で再侵略の準備を進めてきた日本は、1597 年、14 万5,000 の兵を朝鮮へ送り込んだ。

当時、党争をこととしていた一部官僚の策謀により、李舜臣将軍は三道水軍統制使の職を解かれていた。後任の元均（ウォンギュン）は無能なうえ、敵をあなどって戦いを進めたため、7 月の漆川（チルチョン）島沖の海戦で惨敗し、水軍の大半を失った。

日本軍の再侵攻を阻止し、戦局を有利に展開させたのは、陸地における稷山（チクサン）の戦いと、海上における鳴梁（ミョンリャン）海戦での勝利であった。

9 月初め、朝鮮軍は稷山で敵の先鋒部隊に痛撃を加え、全面的反撃の端を開いた。

8 月、統制使に再任された李舜臣将軍は、9 月、12 隻の軍船をもって鳴梁海峡の海戦に臨み、330 余隻の日本水軍を向こうに回して 30 余隻の敵船を撃滅し、4,000 余の敵兵を殺傷した。

鳴梁海戦の惨敗で日本軍の水陸並進策はまたも破綻し、朝鮮艦隊は再び南海の制海権を握ることになった。鳴梁海戦に破れた日本軍はついに総退却を開始した。

朝鮮軍は全前線に渡って反撃に移り、蔚山の島山（トサン）城包囲戦など多くの戦いで敵を掃滅した。

朝鮮水軍は日本軍の動きを牽制する作戦を展開した。

1598 年 9 月、朝鮮軍は東路、中路、西路の 3 軍に分かれて総攻撃をかけた。

当時、朝鮮軍は 9 万 5,000 を数えたが、南海岸に追い込まれた日本軍は 8 万余であった。泗川の新（シン）城と蔚山の島山城に立てこもっていた敵軍は、朝鮮軍の攻撃に耐えかねて、11 月 17 日と 18 日、それぞれ城を抜け出し、船に乗って逃走した。

日本軍は、慶尚道からは完全に駆逐されたが、全羅道順天(スンチョン)の倭橋(ウェダリ)にいた小西部隊は、海上を封鎖されて逃げることができず、慶尚道の沖合にいた日本水軍に救援を求めた。1598 年 11 月 19 日、日本水軍は小西部隊を救出すべく 500 余隻の軍船を集めて鷺梁に向かった。ここで日本水軍を迎え撃った李舜臣将軍の率いる朝鮮水軍は、200 余隻の敵船を撃沈、撃破し、およそ 2 万の敵兵を殺傷した。李舜臣将軍は戦闘が終わりに近づいた時、敵弾に当たり陣没した。

朝鮮艦隊は、鷺梁沖海戦で日本水軍に完勝し、小西、島津の両陸上部隊を大敗させた。鷺梁沖海戦は、壬辰祖国戦争の最後を飾る戦いであった。

苛烈をきわめた壬辰祖国戦争は、愛国と売国、忠臣と逆臣を分かつ戦いであり、朝鮮人民の愛国心と犠牲精神、創造的知恵が余すところなく発揮された闘争と創造の戦いでもあった。

7 年間の壬辰祖国戦争で朝鮮人民が勝利したのは、なによりも戦争の担い手である愛国的人民と軍人が民族の自主権と尊厳を守るため勇猛果敢に戦ったからである。日本大軍の奇襲によって生じた初期の不利な戦局を有利に転換させたのは、民族あげての武力抗争であった。人民は義兵部隊を立ち上げて侵略軍と戦う一方、農作にも励んで軍糧を確保し、戦争の勝利に大きく寄与した。

勝利の要因は次に、朝鮮軍が当初の劣勢を挽回し、数量的にも軍事技術的にも優位を占めるに至ったことにある。戦争開始後、多くの愛国的人民が義兵部隊や官軍に続々と入隊して朝鮮の軍勢は急増し、それに、人民の愛国的熱意と創造的知恵によって鳥銃、双穴銃、飛撃震天雷、火箭、鉄丸など各種の砲や艦船、特に世界最初の鉄甲船である亀甲船が多数建造されて、日本軍を圧倒するに至ったのである。

李舜臣、郭再祐(クァクチェウ)、金応瑞(キムウンソ)など諸名将のすぐれた指揮も戦局を有利に導いた。

朝鮮人民の勝利の歴史的意義は大きい。それは、国の自主権を守り、祖国の尊厳と栄誉を輝かせたばかりでなく、朝鮮についで明の征服を夢見た日本の侵

略計画を破綻させることで、アジアの安全と平和の守護に大きく寄与したことにある。

このように壬辰祖国戦争は、中世朝鮮人民の反侵略闘争史を立派に飾った戦争であった。

愛国名将李舜臣将軍の指揮のもと、朝鮮水軍が亀甲船を駆使してあげた戦果は次の通りである。

№.	年 月 日	海 戦 名	撃 沈 数
1	1592 年 5 月	玉浦・合浦・赤珍浦沖海戦	44
2	5 月 29 日	泗川沖海戦	12（他に 1 隻拿捕）
3	6 月 2 日	唐浦沖海戦	21
4	6 月 5 日	唐項浦沖海戦	26
5	6 月 7 日	栗浦沖海戦	8
6	7 月 8 日	閑山島沖海戦	59
7	7 月 10 日	安骨浦沖海戦	42
8	8 月 25 日～27 日	長林浦・多大浦・西平浦・絶影島沖海戦	24
9	9 月 1 日	釜山浦沖海戦	100 以上
10	1594 年 3 月	鎮海・唐項浦沖海戦	31
11	9 月～10 月	場門浦・永登浦沖海戦	2
12	1597 年 9 月 16 日	鳴梁海戦	30 以上
13	1598 年 2 月～3 月	古今島沖海戦	16
14	7 月～8 月	折爾島沖海戦・古今島沖海戦	50 以上
15	1598 年 11 月 19 日	鷺梁沖海戦	200
計			660 以上

2　李舜臣将軍

李舜臣将軍は、水軍の名将であるばかりでなく、世界的な大発明家であった。彼は今を去る数百年前に朝鮮水軍に必要な艦船の建造を高い技術水準を持って指揮し、数世紀にわたって蓄積された科学技術の粋を総合して、世界で初めて強力な鉄甲船＝亀甲船を立派につくりあげた。

将軍は朝鮮水軍の発展に巨大な功績を立て、壬辰祖国戦争の勝利に大きく貢献した愛国名将であった。

李舜臣将軍は、1545 年、李貞（リジョン）の 3 男としてソウルで生まれた。幼時から利発で勤勉な彼は、学問と武術の練磨に励んだ。弟の向学心に感心した兄たちは、彼が儒学者になることを願い、将来を期待した。しかし、彼は儒学にとどまらず、軍事学の研究と武術の練磨に力を入れ、1576 年、31 歳で科挙の武科に合格した。

当時は、李朝時代初めに制定された土地制度など諸制度が乱れ、封建的中央集権体制が弱体化していた時期であった。堕落した封建支配層は、人民を苛酷に抑圧、搾取する一方、党争に明け暮れ、対外的には事大主義に陥り、無気力な腐敗した存在に堕していた。李舜臣は、国を滅亡に導きかねない党争を心底から憎悪し、国防対策に深い注意を向けた。

党争を事とするやからとの交際を潔しとしなかった彼は、高官の中に知己がほとんどなく、科挙で優秀な成績をあげながらも低い官職に甘んじるほかなかったが、栄達を願って権力に媚びるようなことはしなかった。

時の兵曹判書（国防大臣）金貴栄が李舜臣を女婿に迎えようとしたが、彼は「官途に就いて、なんで権門勢家に頼ろうものか」と言って拒絶した。

李舜臣が鉢浦水軍万戸（万戸は武官職の一つ）をつとめていた時のこと。水軍節度使成鏄が琴をつくろうとして官邸の庭にあるキリの木を伐らせようとしたとき、李舜臣は、国財を私事に使ってはならないとして制止した。成鏄は腹の虫が納まらなかったが、李舜臣の清廉剛直な人柄にのまれて断念せざるを得なかった。1586 年、42 歳の時、李舜臣は、造山堡万戸に任命され、豆満江流域で女真族の侵入を防ぐことになった。現地では鹿屯島屯田官（軍糧を自給自足する屯田の責任官吏）を兼任した。彼は屯田兵数が少なすぎることを案じて再三兵の増員を求めたが、兵馬節度使は耳を貸さなかった。案に違わず、女真族は、同年秋、不意に造山堡に侵入して略奪、暴行を働いた。守備兵は小数であったが、李舜臣は陣頭指揮をとり、巧みな戦術をもって敵兵を一網打尽にした。

ところが、李舜臣の功労をねたんだ兵馬節度使は、政府に戦いに敗れたと偽りの報告をしたため、彼は罷免され、一兵卒に格下げされた。けれども彼の愛国心は曇ることがなかった。

その後、李舜臣は全羅道助防将に任ぜられ、1589 年からは井 邑県監、珍島郡守、加里浦僉使を歴任したあと、1591 年、全羅左道水軍節度使に任命された。

彼は日本軍の侵略を予想して、水軍の強化に全力を傾け、部隊の補充・整備、軍糧の備蓄、武備の改善などに尽力するとともに、世界最初の鉄甲船である亀甲船の建造を指導した。亀甲船の建造は艦隊の強化に大きく役立った。

このように朝鮮水軍は、李舜臣将軍の努力により開戦を待たず日本侵略軍を迎え撃つ準備を整えたのであった。

壬辰祖国戦争の際、封建支配層はあわてふためいて逃走したが、将軍は生命を賭して国を守ることを決意し、次のような詩を詠んだ。

月影さやかな閑山島の夜
ひとり矢倉に座り
大刀を腰にして
憂いに沈むとき
草笛の音ひびき
断腸の思いをつのらせる

李舜臣将軍の率いる朝鮮艦隊は緒戦から連戦連勝して日本軍の水陸並進策を破綻させ、戦局を朝鮮側に有利に転換させた。

日本軍は、1592 年末から全羅道一帯に大兵力を投じ、朝鮮水軍の基地を攻略することで水陸並進策をあくまでもおし進めようとした。

これに対処して将軍は、1593 年 7 月、全羅左水営を麗水（リョス）港から閑山島豆乙浦（トゥウルポ）に移した。この時、彼は三道水軍統制使に任命された。

将軍は、休戦期間も敵の動きを牽制し、彼らが全面撤退をおこなっていない状況にあって、戦闘準備の強化に努めた。

1597 年 1 月、日本軍が再侵入を開始した時、敵の奸計にかかり、さらには李舜臣将軍をねたんだ慶尚右水使元均のざん言を真に受けた李朝政府は、将軍に対馬方面に出て敵を迎え撃つよう命じた。将軍はそれを無謀な作戦であるとして、命令に従わなかった。これが災いして彼は三道水軍統制使の職を解かれたうえ、敵に内通したと言う濡れ衣を着せられ、死刑を宣告された。

しかし、四方で抗議の声が高まり、九死に一生を得た将軍は都元帥（地方軍

司令官）権慄（クォンリュル）の部隊で一兵卒として服役することになった。

李舜臣将軍のあとをついで三道水軍統制使になった元均は、敵の計略にはまり、1597 年 7 月、漆川島沖の海戦で惨敗を喫して戦死し、艦隊は壊滅状態に陥った。

朝鮮水軍の弱体化に乗じて、日本水軍は南海を制圧して朝鮮西海を北上し、陸軍は南原（ナムウォン）を落とし、さらに進撃を続けようと企図した。

漆川島沖海戦の敗報に驚いた政府はあわてて、同年 8 月、李舜臣将軍を再び三道水軍統制使に任じたがその時、彼が引き取ったのはわずか 12 隻の戦艦と 200 名の兵員だけであった。水軍の惨憺たる状態を案じた政府は、当分の間陸地で戦うよう勧めたが、将軍はこれを拒み、国王に次のような返書を送った。

「壬辰年（1592 年）後、敵軍があえて全羅・忠清両道を攻撃できなかった主因は、わが水軍が両道の要所を固めていたからであります。

私には 12 隻の戦艦がありますゆえ、死力を尽くして戦うならば、まだまだ勝てる望みはあります。万一水軍を全廃するならば、敵はこれを幸いとし、やがて忠清道を経て漢（ハン）江に至るでしょうが、これを私は憂えるのであります。たとえ戦艦は少ないにせよ、不肖私が生きている以上、敵はわが水軍をあなどれないでしょう」

戦いの準備に取りかかった将軍は、水軍基地を全羅道の珍島に移し、重なる悪条件を克服しながら水軍の整備・強化に努めた。

日本軍は 330 余隻の大艦隊をもって、朝鮮水軍を一撃のもとに粉砕しようと勢い込んだ。1597 年 9 月 16 日、李舜臣将軍は 12 隻の艦船を率いて鳴梁海峡に日本水軍を迎え撃ち、ここで 30 余隻の敵船を撃沈し、4,000 余の敵兵を殺傷する輝かしい戦果をあげた。その後、水軍の再建に尽くした将軍は、1598 年 2 月、水軍の指揮処を宝花（ポファ）島から古今（コグム）島（全羅南道莞（ワンド）島郡）に移し、侵入する日本艦

隊をつぎつぎに撃破した。同年 3 月、古今島沖に侵入した 16 隻の敵船を撃破したのをはじめ、7 月には折爾(チョルイ)島（全羅南道宝城(ポソン)郡）沖に、8 月には再び古今島沖に侵入した日本水軍に反撃を加え、50 余隻を焼き払う赫々たる戦果をあげたのである。

1598 年 5 月、もはや勝算がないと見た豊臣秀吉は和議を申し出たが、朝鮮側の強い反発にあって窮境に立ち、8 月、苦悩のうちに死亡した。朝鮮人民の徹底抗戦を前に戦争を続けることができなくなった日本軍は、総退却を企図し、500 余隻の艦船を急派した。

李舜臣将軍は一兵たりとも逃がすまじとして、海路を封鎖した。敵将小西は、愚かにも将軍に賄賂を贈り、退路を開いてくれるよう懇請した。激怒した将軍は、壬辰年以降無数の日本軍を打ち破って分捕った銃剣が山をなしている、このうえ彼らから何をまた必要とするのか、朝鮮人は日本兵の首級をこそ宝としているのだ、こんな銃剣がなんで宝となれようか、と言って小西の申し出を一蹴した。

1598 年 11 月 19 日朝、李舜臣将軍はついに全水軍に出撃命令を下し、鷺梁（慶尚南道南海(ナムへ)郡）へ向かった。壬辰祖国戦争の最後を飾る鷺梁沖の海戦が開始された。

熾烈な戦いが繰り広げられ、身の危険を顧みず陣頭指揮を取っていた李舜臣将軍は、勝利を目前にして致命傷を負った。彼は、握っていた軍旗を甥の李莞(リワン)に手渡し、「今は戦いの最中だから、私の死を伏せておくのだ」と言い残して息を引き取った。遺言どおり、李莞は軍旗を振りかざし、全将兵を最後の決戦へと奮い立たせた。

こうして朝鮮水軍は大勝を博し、7 年間続いた壬辰祖国戦争は朝鮮人民の勝利に終わった。

それから数百年の歳月が流れたが、国家と民族の危機を救って生命を捧げた李舜臣将軍の愛国心と功績は人民の間で連綿と語り継がれ、歴史に光を放っている。